

多声のエスノグラフィを記述する試み¹⁾

坂部晶子『「満洲」経験の社会学』を読む

阿部 安成

2009 年 11 月 27 日に開催された滋賀大学経済学部ワークショップ「Asian Studies Workshop 伍」は、「多声のエスノグラフィを記述する試み - 生きられた「満洲/満洲国」経験を日本社会と中国東北社会で聞く」の題で、『「満洲」経験の社会学 - 植民地の記憶の私たち』(世界思想社、2008 年)の著者坂部晶子さんをお迎えして、阿部の書評報告をもとにディスカッションをした。この小文は、報告の録音音声文字起こし²⁾、それに手をくわえた論稿である(稿をまとめるにあたって、報告時の副題をかえた)。

...

まず、「満洲」研究の専門家ではないわたしが報告するという書評会を企画した背景をかたんに述べましょう。このところわたしが業務を担当している滋賀大学経済経営研究所(以下、研究所)には、彦根高等商業学校以来の植民地関係の資料があります。ある時点で研究所は資料のうけいれをやめました。するとそののち、ほんとうに偶然の機会をえて、高等商業学校とは縁がないところから「満洲」の引揚資料をもらうことができました。ずいぶんと時間がかかりながらも、ひとまずその大雑把な目録はつくり終えました³⁾。

さてそのあとどうするかというところで、科学研究費補助金を申請したところうまく採択されました。そこでどのような研究をおこなおうとしているかという、1 つに、研究所が所蔵する「満洲引揚資料」という記録がなにであるのかを明らかにしようとおもっています。そのためにいま、詳細目録をつくっているさなかです。まえに坂部さんにもお送り

1) 本稿は 2009 年度科学研究費補助基盤研究(C)「第二次世界大戦後の「満洲引揚げ」とその歴史意識についての実証研究」の成果の 1 つである。

2) 文字起こしには滋賀大学経済経営研究所の研究サポートをえた。

3) 阿部安成、江竜美子「「満洲引揚」スタディーズの試み - 整理、調査、議論」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.98、2008 年 4 月)に収載。

した目録は簿冊単位でした。その簿冊に綴じられた文書 1 点ずつの細目目録をつくり始めました。

もう 1 つは、その「満洲引揚資料」がなにであるかを明らかにするだけではなくて、その資料をもとにして、「満洲」あるいは「満洲国」、「引揚げ」、「戦後」、といった歴史を構成する出来事をめぐる歴史意識を論じようと考えています。この 2 つめの課題については、ここ最近の「記憶」をめぐる議論を参照する必要があります。この点で、坂部さんの『「満洲」経験の社会学』という著作は格好の教科書になるとおもい、それで合評会という機会を設けていっしょに議論したいというのがわたしの希望でした。

§

「記憶」をめぐる議論を参照すると掲げたものの、坂部さんのご本では「経験」のほう为主题におかれ、「記憶」の語は副題に入っています。わたし自身の 1 つの整理として、このところ、この「経験」にかんするどのような研究動向があるのか、ごくかんたんに素描してみました。

「経験」という概念や観点をつかっての研究は、歴史学においてはそう多くはないものの、じわじわ広がってきているという印象があります。たとえば、大門正克さんは、「シリーズ日本近代からの問い」の 1 冊として、『民衆の教育経験 - 農村と都市の子ども』（青木書店、2000 年）をお書きになり、また、編著として「近現代日本社会の歴史」の 1 冊に『戦後経験を生きる』（吉川弘文館、2003 年）を編んでいらっしゃいます。また、成田龍一さんが『近代都市空間の文化経験』（岩波書店）という論文集をお出しになったのが 2003 年、そして 2007 年には安丸良夫さんが『文明化の経験』（岩波書店）をおまとめになりました。岩波書店から「経験」を書物の内容をあらわす重要な語として用いた研究書がつづけて出ているというところには、編集者による仕掛けがある、いいかえれば、（あたりまえのことですが）あだやおろそかにこの「経験」という語が用いられているのではない、ここには 1 つの研究上の戦略が押し出されているはずで

ただ、成田さんの本も安丸さんの本も、どちらもこれは既発表の論文集ですので、もしかすると収録したそれぞれの論文を書いたときには、それほど「経験」という語を意識し

ていなかったかもしれませんが。おおまかにいうと、2000 年くらいからこの「経験」という語があらためて重視されるようになってきた⁴⁾。歴史学にとって、この語を論点とする動向はあたらしい展開でしょう。ただしこれは、すでに提示されている「表象」をめぐる議論と重なる、あるいはそれにつながっている、とわたしはおもいます。

わたしたちが研究の素材として用い、読む史料も表象であり、われわれが書く歴史も表象である　　というところで、歴史をめぐる表象をどのように読み、書くのかという議論が、この「経験」という語を使ってあらわされようとしている過去と重なる。しかもこの表象や経験をめぐる議論は、構成主義（あるいは構築主義）⁵⁾の問題ともかかわっています。ひとまず研究上の区分をおこなうと、歴史学と社会学では、それぞれにピーター・バーガーの著作をどのくらい読んでいるのでしょうか。歴史学の研究者は、そう読んではいないでしょう。その点、安丸良夫さんのゼミナールでは、かなりはやくからバーガーとルックマンの著作を読んでいました⁶⁾。安丸さんの問題の立て方には、バーガー＝ルックマンの構成主義の議論が根底にあった、あるいはずっと気にしていたといえるでしょう。

この表象や構成主義という議論は、もう 1 つべつの言葉でいうと、「生きられた lived」という語であらわされる観点につながります。表象の歴史学とは、過去の出来事をたんに事実として確定するにとどまらず、あるいは、そうするのではなく、過去の出来事をだれかに生きられた事象としてとらえる、そういう歴史学なのです。かんたんにいうと、「経験」という語を用いる歴史学の研究動向には、こうした由来、あるいは広がりがあるでしょう。

§

そして、記憶。これについては、もう 10 年ちかくまえになりますが、わたしたちは『記憶のかたち - コメモレイションの文化史』（阿部安成ほか編、柏書房、1999 年）という論文集を出したことがあります。当時、1990 年代のなかばくらいから、記憶をめぐる議論は戦争におけるそれとして提示されてきました。この点をわたしたちははっきりと意識してい

4) あとで気づいたが、鹿野政直の 2007 年度歴史学研究会全体報告には「沖縄の経験」の論題がつけられていた（『歴史学研究』第 703 号、1997 年 10 月）。

5) 上野千鶴子編『構築主義とは何か』（勁草書房、2001 年）。

6) ピーター・L.バーガー、トーマス・ルックマン（山口節訳）『日常世界の構成 - アイデンティティと社会の弁証法』（新曜社、1977 年）など。

て、戦争とはべつな領域で記憶を議論するという了解が编者たちのあいだで共有されていました。その論集でわたしは、横浜の歴史意識や歴史記述をとりあげました。わたしをふくめた 3 名による報告をメインとして、それに 3 名のコメントをつけるという構成の本をつくったのです。

これについては幸いにも、いくつか書評が出ました。そのなかでいちばん厳しかったのが、岩崎稔さんの批評でした（「忘却の効用」論、あるいはニーチェについて」(3)『未来』第 395 号、1999 年 8 月)。岩崎さんは連載中の論考の 1 回をわたしたちの本への書評にあててくださいました。彼はそこで、記憶を論じるときなぜそのかたちを問うのか、とわたしたちの根本の構えに疑問をむけたのです。記憶を議論するときはむしろ、かたちになりえない、それは史料においても過去のようすをなかなかかたちにしえない、そしてわれわれが表現するときにもなかなかかたちになりえない、そういった領域をこそ議論すべきだ、という点が岩崎さんのもっとも重要な批評でした。

わたしたちは、サブタイトルに「コメモレイションの文化史」とつけたとおり、記念という事象や行為を検証するわけですから、当然のように記憶をそのかたちにおいて論じるというねらいを持っていました。そこを岩崎さんに、いわばぶん殴られたようになったわけです。では、どう論じるのか、どのように論文として書くのかはとてもむづかしいところで、わたしたちは、この批評をうけて、けっこう悩んだものでした。

研究所が所蔵する「満洲引揚資料」の活用をめぐっては、もう 1 つ、坂部さんもくわわっておられた山本有造さんたちの共同研究を参照しなくてはなりません。山本さんたちは、「記憶と歴史」をサブタイトルとした『満洲』（山本有造編、京都大学学術出版会）という共同研究の成果を、2007 年にお出しになりました。これについては、わたしも『週刊読書人』（第 2688 号、2007 年 5 月）で書評を書く機会をあたえられました。書評でのわたしの論点は、この論集では、サブタイトルに「歴史」とならべて掲げている「記憶」について、それを十分に論じたのか、というところにありました。わたしもさきにふれたとおり、友人たちと『記憶のかたち』という論集を出したのだから、「記憶」をめぐる議論はずっと気になっています。たとえば歴史学研究会という学会は、流行に敏感というか流行にすぐ乗

るようなところがあって、2000 年度大会特設部会で「記憶」の意味 - コメモレーション論と現代」というテーマを掲げたり、その前後の時期に総合部会例会でも「記憶」をとりあげたりしたことがありました。2000 年度大会特設部会では 3 名の報告があって、そのうちの 2 つの報告は、「記憶」という用語を「歴史」に置き換えてもほぼなりたつような議論だったとおもいます。いいかえると、「記憶」を論じてないということです。山本さんたちの論文集『満洲』についてそこまではいわないにしても、どれだけ、どのように「記憶」を論じたのかと、『週刊読書人』では問いました。

わたしの書評はいつも乱暴なのかもしれません。『週刊読書人』の編集者から、書評の書き方というのは 2 つあって、1 つはその著作で議論された内容をどのようにのばすのか、その方向性を示すもの、もう 1 つは、こんなにも不十分な議論ではないかと貶すもので、阿部の書評はいつも後者だといわれました。書いているほうがするといくらか反論したいところがありますが、どうやらそうみえる書き癖になっているようです。ただ、『週刊読書人』の書評は 1500 字でいどのごく短い紙幅なので、言葉足らずのところを補ったまとまった書評をべつに書こうとおもいながら、ずっとそれができずにいます。

§

このあたりから、だんだんと坂部さんが問題にしてきたことは、どういう研究状況におかれるのかについて念頭におきながら話しているつもりです。歴史学研究においては、その学のなかでの位置はともかくとして、これまでも経験や表象、あるいは記憶について議論されています。そこではこれまで、「満洲」の記憶や経験といった議論はなかったかもしれませんが、歴史学研究のなかでもすでに、経験や記憶というものを論じる土壌がずいぶん広がっていたのではないかと、ということがわたしの主張の 1 つになります。

たとえば、坂部さんは、このご本の中でサバルタン・スタディーズを参照しておられます。すでに成田龍一さんが指摘しているところで、この研究動向や方法や観点を日本史研究においてみると、民衆思想研究、あるいは民衆思想史研究や民衆史研究にあたるといえます。ただ、これまでの民衆思想研究や民衆史研究は、ほとんど日本の国境をこえて研究のフィールドを設定することがなかったし、研究の発信としてもあまり国境の外にはむけ

てこなかったという経緯があります（アジア民衆史研究会などの動向があるが）。そうした動向を想い起こすと、日本史をフィールドとした研究以外でも、民衆思想研究の方法に似た、それにちかい研究がいくらか出てきたという観があります。

つぎにもう 1 つ、用語でいうと「生活世界」という表現も、坂部さんのご本のなかで用いられています。これについても、社会史研究の系統で、とりわけ二宮宏之さんが研究を展開さなってきました。しかも二宮さんは、生活世界と権力秩序とを結びつけて議論するというわけです（『歴史学再考 - 生活世界から権力秩序へ』日本エディタースクール出版部、1994 年）。この二宮さんの構えは、民衆思想研究で安丸さんがおやりになってきたことと重なりあいます。二宮さんはただ、だいぶ筆が遅いひとだったようですし、まとまったフィールド研究というのはそれほどおやりになっていない方でした。もとより二宮さんのお仕事は、たんなるフランス社会史の輸入ではありません。表象論の提起もかなり早い時期に示していたとおもいます。

またあとでも述べますように、坂部さんのご議論というのは、いったい語りや日常や文化というものの数がいくつなのかという、その数を問題にしているところがあるとおもいます。これは、ご本のなかでも参照されているクリフォード・ギアツにかかわる議論です（『文化の解釈学』、吉田禎吾ほか訳、岩波書店、1987 年）。ギアツの著書が翻訳されて以降、いろいろと文化をめぐる読み書きの議論が広がりました⁷⁾。だからわれわれは、文化とはなにか実体としてあるものではなくて、それを記録したものをどのように読み、それをわれわれがどのように記すのかということも、もう十分に研究の視野に入っているはずです。

こうした研究状況があって書かれたのが、この『「満洲」経験の社会学』というご本になります。

§

ここまでみたとおりの研究の状況や動向があるなかで、まず 1 つ問いたいのは、この坂

⁷⁾ 谷泰ほか編『文化を読む - フィールドとテキストのあいだ』（人文書院、1991 年）、クリフォード・ギアツ（森泉弘次訳）『文化の読み方 / 書き方』（岩波書店、1996 年）、ジェイムズ・クリフォードほか（春日直樹ほか訳）『文化を書く』（紀伊国屋書店、1996 年）。

部さんのご本のタイトルにいう「社会学」についてです。なぜ社会学なのか、ここにいう社会学はなにをあらわしているのか、ということです。とはいっても、べつに、学問は歴史学、社会学、文化人類学ときっちりと区分けされていて、それにのっって議論をたてなければならないなどというつもりはまったくありません。研究者はそれぞれに自分自身が育ってきた学の原理のようなものがあるでしょうし、そこから抜けようとしたり、それを相対化しようとしたりしながらそれぞれに自前の仕事の仕方を模索しているとおもいます。ここであえて社会学を掲げたことには、どういう意図や意義があるのかということはお聞きしたいとおもっていました。

歴史学と社会学との境界はだいぶ低く薄くなってきていて、それこそ『ソシオロジ』（社会学研究会）にも、歴史学研究の論文とみてよいような論稿がだいぶ掲載されているとみえます。それどころかむしろ、社会学の方が歴史学を凌駕しているかもしれません。

とくにそうした印象をうけたのは、岩波講座現代社会学（全 26 巻、別巻 1、1995 年～1997 年）が出たときです。あれだけのシリーズを、しかもテーマごとにつくれることに驚いた憶えがあります。歴史学では、かつては時代で区切って日本歴史とか日本通史を出すしかなかったのですから（いまではいくらかわりましたが）、社会学は一気にまとまるとらえ方そのものをかえてしまった。そうした企画にくわわれる研究者があれだけいる。歴史学が議論してきた対象もとりあげている。あれが出たときに、だいぶようすがかわったとおもいました。だからもはや単純に、あれは歴史学、これは社会学などと区切る必要はない。けれども歴史学はまだまだ認識論のうえでは^{おくて}晩熟で、それを社会学がのりこえつつあるのではないかと、ひとまず歴史学に籍をおきながら（というのもおかしなものですが）感じています。

だから、ここで「満洲」という歴史の事象を対象にするときに「社会学」と看板を掲げたところの観点やねらいがどこにあったのか、について問いたいとおもいました。

「満洲引揚資料」を活用するというわたしたちの仕事の前提を、これまでみたとおりとらえたうえで、その格好の教科書である坂部さんのご本というのは、なにをしようとしていたとみえるのか、それをつぎに述べてみます。

§

坂部さんのここでの仕事を、3 つに区切ってみました。まずは、生きられた植民地経験、について。生きられた植民地経験をつかみ、それを問うということが坂部さんのお仕事のいちばんの眼目としてある。では、それをどこでつかむのかというときに、2 つの言説空間

これはフィールドといってもいいとおもう、それを設定しています。戦後の日本社会と開放後の中国東北社会、こうした 2 つのフィールドあるいは言説空間のなかで生きられた植民地経験をつかまえてみせるということがあります。

「ナショナルな物語としての植民地経験を語る言説空間が、植民地期以降の時期に日本と中国の双方で形成されてきた」(221 頁)、そして、それを参照して表出された植民地経験の語りがある、それを描き直してみようというのが大きな意図になっているとおもいます。従来の手法であれば、植民地期以降の 2 つのフィールドで、それぞれに公認された、国家をめぐる歴史との対比で個別の植民地経験の語りがとらえられたでしょうが、ここでは、「ナショナルな物語」として語られる「植民地経験」が多様かつ多層であるところをつかまえようと試みられています。そのところで、「植民者、被植民者の生活世界の再構成と、彼らの記憶のかたちについてのエスノグラフィを描きだすこと」(7 頁)、これがご本での課題だと示されています。しかもそのエスノグラフィを描くときに、本文中で「輻輳」「多層」「多様」「多声」の語がくりかえし使われているとおり、そこに複数性を描き込むという、強い使命感といってよい意思を感じます。そこで、きょうのわたしの報告論題を、「多声のエスノグラフィを記述する試み」としたしだいです。サブタイトルも、「生きられた「満洲 / 満洲国経験」を日本社会と中国東北社会で聞く」としました。

歴史学がなじんでいるとらえ方からすると、このお仕事は日本史なかの中国史なのかという分類をするむきもあるでしょう。しかし坂部さんのお仕事は、日本史でも中国史でもない。ここにいう中国史には、満洲国史や満洲史をふくめています。そうした歴史記述を目指されていることとなるとうけとめました。この点からしても、さきほど述べた疑問とつながって、この本のタイトルになぜ社会学が掲げられているのか、ともう 1 度問おうとおもいます。

記憶を議論するということが、これはさきほどもいいましたとおり、1990 年代のなかばくらいからいろいろな学問領域でとりあげられてきたわけで、この記憶を議論するということが、なにか人びとの実体としての記憶をとりだしてみせるということではなくて、その記憶ということの方法あるいは観点とすることによって、従来の歴史記述と違う歴史の書き方をめざす、あるいは歴史という過去の事象をめぐる歴史学が持っている学知を問い直す、ということになります。坂部さんのこの作品は、たんなる歴史記述ではなく、坂部さんもご本のなかで成田さんを歴史評論の一派としてとらえているようなところがあるとおり、歴史評論、歴史の問い方、歴史の記し方を議論するジャンルになるのだろうとおもいます。ならばこれはもう、歴史学でも社会学でもなく、既存の学問の区分には分けられない、これまでであった学知そのものを問い直すお仕事につながってゆくと、わたしはうけとめています。

§

生きられた植民地経験をとりだしてみせる、そしてそれらを再構成する、それを議論するフィールドや言説空間を 1 つではなくて 2 つ設定した これに関連する作業はおそらく、これまでも日本史という領域において、日本人を対象にした例はあったでしょうし、中国でも同様にあったかもしれませんが、しかし、両方の地域にまたがっておやりになったという点での斬新さがここにはあるとおもいます。史料とフィールド調査をふまえて書くエスノグラフィのなかに複数性をとりいれること、これが坂部さんのお仕事の重要な課題であり、成果につながるのでしょう。このようにお仕事の意義を確認したうえで、このご本で示されたことがらをめぐってどういう観点で議論ができるのかということ、3 つ示してみましよう。

そのまえに 1 つお断りすると、もっとはじめに提示しておかなくてはならなかったのですが、あまり細々とご本の内容を紹介して批評するというよりは、ごくおおづかみにとらえてみると、いったいこのご本ではなにが問題にされて、なにが示されようとしたのか、という観点から議論したいとおもいます。

1 つめの論点は、さきほども 2 つの言説空間のところ、少しふれたとおり、坂部さんのと

らえ方だと、戦後の日本社会にも開放後の中国東北社会にもとても強固な「ナショナルな物語」これはべつないい方をすれば、ご本の中で述べられていた「大きな歴史」「マクロな歴史」、あるいは「モデル・ストーリー」となります があるということについて。

わたしはきょうの報告をくみたてるにあたって、『ソシオロジ』に掲載された書評はあえて読まなかったのですが⁸⁾、といってもちらっとはみたのですが、そこでは概念をどのように設定するのかが1つの論点として出されていました。このことにもつうじるところで、ご本を読んでいると、「モデル・ストーリー」、「ナショナル・ヒストリー」、それから「大きな歴史」といった概念で指し示されることがらがかなり曖昧に、あるいはどれも同じような扱われ方をしているようにみえました。坂部さんのとらえ方には、「ナショナルな物語」が強固にあって、それがそれぞれの社会あるいは言説空間で個々の記憶を抑圧している、または、それぞれの記憶がその「ナショナルな物語」に統合されてしまうほどに、それがとても強い働きをしているという見方があると読みました。

たとえば、本文中にもあるとおり、中国社会での記憶の「語りの枠組みをなすのは、植民地支配への抵抗と民族の独立をめざしたヒーローを称揚するディスコースであり、それらをとおして新中国建設へといったネーション・ビルディングの物語である」(198 頁)という仕組みがあるとの指摘、また、「歴史の解釈をかたちづくる枠組みが、複数あるイデオロギーのなかのひとつではなく、必然的な道筋として構想されているという中国社会体制の特徴」(204 頁)との指摘がある。個々の記憶が、しかも断片としての記憶が、そのままのかたちで保持されるのではなく、それがより大きなもの、すなわち、ナショナルなものからの圧力によって統合されてしまう、そういう様相が指摘されています。

中国のばあいはたしかに、植民地支配に抵抗することが新しい国家を作りあげていくときのいわば原点になっているのだから、国家形成をめぐるそういうストーリーにおいては、植民地支配への抵抗が核になってナショナルなものを支えているのだ、という議論は理解できるところではあります。この様相は、日本社会でも中国東北社会でもみられる、どち

⁸⁾ 猪股祐介による書評と坂部の「書評に答えて」が『ソシオロジ』第 54 巻第 1 号(2009 年 5 月)に掲載されている。また、坂部自身の「自著『「満洲」経験の社会学 - 植民地の記憶のかたち』を語る」が『News Letter』第 20 号(2008 年 12 月)に掲載された。

らもよく似た様相だということです。では中国の様相にみあう、日本のばあいの「ナショナル・ヒストリー」だとか「モデル・ストーリー」とはいったいなにか、それがはっきりとは示されていないとおもいました。

たしかに、日本社会でもナショナルなものが力を持っていて、それがいろいろな個別なものを抑圧する状況や構造があるわけですが、しかしそうした事態と重なりながら、日本社会になにか強固な「ナショナル・ヒストリー」があるのかどうか、しかもそれが「満洲」や戦争をめぐるそれとしてあるのかどうか、ということが問われるでしょう。べつないい方をすると、日本史あるいは日本歴史において聖典となる、しかもそこに「満洲」や戦争の理解や解釈が重要な位置をしめている、そういった物語がわれわれの社会にあるのか疑問だということです。あるのかどうかというと曖昧です。むしろ、それはない、とわたしは考えています。

坂部さんがお書きになっているとおり、「満洲」支配したり運営したりしていたひとたちは、戦後になっても「満洲」建国の理念を信じているわけですが、しかしそれは少数でもあるといえるし、それは主流ではないともいえるわけで、戦後の日本社会において、「満洲」や戦争が大きな比重を占めている「ナショナル・ヒストリー」は、想定しづらいのではないのでしょうか。

§

つぎに第 2 の論点は、これも坂部さんのご本のなかのとても重要な議論である、「多声」についてです。いったい「多声」ということを主張することによって、なにを敵としてどのようにそれを撃つのか、ということです。ご本の終章の最終節のタイトルが「一元化された記憶の語り」に抗して」となっています。複数の声を示すことによって、人びとの日常生活に根ざした記憶が一元化されていく様相に対してつねに抵抗するのだ、という議論はわかるころではあります、とひとまずはいっておきます。

多声性というのは、ご本のなかでも紹介されているマルチカルチュラルリズムの隘路をこえる見通しとも重なっています。これはいかえると、いっけんしたところリベラルな多文化主義であっても、そこにも階層性ができている、また、そこに働いている政治という

ものがある、しかしそうした階層性や政治を問わずに、それぞれの価値を認めるという相対主義の立場では、それぞれに価値があるんだからそれぞれでいいでしょという隘路からなかなか抜け出せなくなる、だからなお、多声性を主張することによってそこをさらにこえようとする展望です。

またいくつかの箇所、「もうひとつ歴史」という書き方への批判がおこなわれています。「もうひとつの」と代替の選択肢を示したとしても、しかしそこでは、その「もうひとつ」が示されるまえの段階にあった一元化、あるいは一元論のくりかえしにすぎない、という議論です。そうしたものに対する批判なのだというのは、ひとまずわかるころではあるわけです。

でも、多声といったばあいに、日本社会における「満洲」や戦争をめぐる議論はすでに十分に多声になっているのではないかと、そういいうところがあるのではないのでしょうか。それはご本のなかでも述べられている、「満洲国」の建国理念をいまだに、依然として、いまなお引きずっている、保持しているひとたちがいるわけですし、それらの人びとはまたべつに、普遍主義の理念、またはそう自覚しうるような主張があったり、あるいはまた、それとも切れて、とにかく日常性に埋没したり、非政治性を持っていたりするような人びとがいるわけです。これは社会全体としてみれば多声ではないか。日本社会をこのように把握してみたところで、ここで「多声」を唱えるとき、いったいそれはなにを撃つ武器になりうるのか、ということが気になりました。

またこの論点を少しずらしてみると、多声のエスノグラフィというとき、それを記した著者は、その多声性とどのようなかわりをしていることとなるのでしょうか。坂部さんは終章で、「ここで観覧してきた記憶の語りの多くには、「満洲国」の実態を示すようなものがほとんど含まれていないといぶかるむきもあるかもしれない」と記しています。実態論とはべつな議論をしているのだという主張です。それはよくわかるころです。

しかし、たとえば 1 つひとつの記述をとりあげると、第 3 章では、まず「植民と引揚げのプロセスと実態について、長野県の事例を概観」し、それをうけて、「植民と引揚げ 長野県の事例から」(第 3 章第 2 節のタイトル)では、「満洲」への開拓団の入植にいたる経

緯と引揚げの情況　これは実態とっていいでしょう　それを長野県のばあいを例に概観するとなっていて、典拠とした史料も明示されながら、いわば客観化された事実、または年表に記される事項ともいうべきことがらが列記されていきます。そのなかには、数値であらわされる移民の数、そのうちの犠牲者の数値、亡くなった場所など、明確に把握できることがらがあげられています。数値と固有名詞がつかねられている記述とっていいでしょう。こうした記述はべつなところでもあり、たとえば 8 頁から 9 頁のところでも、19 世紀から 20 世紀にかけて、日本は台湾、朝鮮、中国およびその他のアジア諸国に対して植民地侵略をおこなったという歴史の概観がおこなわれています。こういう箇所がいくつかあります。

こういった記述は、歴史の本ならばどんなものでもかならずあるとていうるものですし、簡潔な辞書の記述、教科書の記述、年表をいくらか詳しくした記述、とってよい描き方でもあります。だから、ごくあたりまえの、なんら不自然ではない歴史の記し方ではありません。けれども、坂部さんのこのご本はなにを課題としていたのか、とたちかえてみると、それはひとの経験であり記憶であり、生活世界なのだというわけです。そういう領域を守備範囲として描かれているはずのエスノグラフィにおいて、客観性がとても高い記述、決してだれからも異議申し立てがなされるはずもないようにみえる事実を示してゆく、それはどういうこととなるのでしょうか。

もちろんそれらは、個々の人びとの記憶や経験を知ろうとするとき、その背景として知っておかなくてはならない、または、それを理解するうえで役立つ情報だとなるのかもしれません。では、これを記しえる著者とはいったいなにものなのでしょう。著者は、一方でひとの記憶や経験を記録するというわけですが、他方で、そこに記録される人びとの思惑や意思とはべつに、客観化された歴史を描きうるわけです。ここには、個々の経験や記憶に即したことがらと、客観視された事象とを混在してエスノグラフィを描ける著者の特権性があらわれていると、わたしは考えます。これが目についてしまったところで、客観化された実態（らしきもの、のようなことがら）と、生活者の記憶や経験に即した生活世界とを、1 つのエスノグラフィにおいてどのように位置づけるのか、それらを混在

させながら、どのようにして 1 つのエスノグラフィをまとめるのか、それが気になりました。

§

そして 3 つめの論点は、さきの第 2 の論点ともかかわって、坂部さんのご本が出たことによって、従来の議論の構図がどのようにかわったのか、ということです。

ご本のなかでも紹介されているとおり、戦後日本社会において、「満洲」の建国理念を信奉するひとたちがいました。それを戦前への回帰や復古と批判する動向は、単純に言えば、マルクス主義を根幹にすえた実証史学による帝国主義研究、帝国主義批判にあったわけです。坂部さんもご本のなかであげている、浅田喬二や小林英夫などの研究者は、(彼らは個々には実証に重点があるのか、マルキシズムに重点があるのかはともかくも) 戦前の精神や思想や歴史の見方を否定しようと攻撃した、そうした対立の構図がありました。

ついで近年では、そうした研究とはかなり明確に一線を劃する、山本有造さん、山室信一さん、駒込武さんの研究が出てきました。これらの研究はごくかんたんにいうと、できるだけ対象に即して議論するという手法です。こうした研究では、「満洲国」の建国理念はどこに結びついているのか、植民地支配の内実が現地の文化をどのように応用したり横領したりしながらそれが意味をもっていたのか、が明らかになってゆく。こうした点で、マルクス主義実証史学による帝国主義批判とはずいぶん違う議論が出てきたといえるでしょう。

では、坂部さんはどこにもっとも焦点をあわせているのでしょうか。それは、同窓会に集うようなひとたち、そして「満洲」での生活を懐かしみながらも、しかし自分たちの記憶の表出には政治性をかかわらせない、または、政治とは強くはつきりと距離を保とうとしているひとたちの記憶。そうした人びとの経験や記憶をうまくつかまえないという意思が坂部さんにはあるとおもいます。ナショナルなものをささえる一方で、政治に距離をおく断片としての日常感覚や「実践感覚」(234 頁)を保持しているひとたちの経験や記憶をもとにして、彼ら彼女たちの日常の生活世界を再構成し、そこに「多声」なるものを織り込んだエスノグラフィを描くのだという意味です。ただし、こうした作品やお仕事はどう

いう議論の構図のなかに位置づけられるのかについては、わたしはうまく整理することができませんでした。

いったん議論をかえましょう。坂部さんは、どういった人びとに着目しているのでしょうか。「二種類の自己呈示を要求されている」ひとたちがいる、と記しています(230 頁)。それは、植民者としてでかけ、中国で長いあいだ暮らし、そして日本に帰ってきたようなひとたち⁹⁾。そうした人びとの、日本向けの、中国社会向けの発言や表現が異なっているという例がとりあげられています。この事例はべつにいえば、分裂したアイデンティティを抱え込まなくてはならないひととなりますし、あるいは、それぞれの社会にうまく適用して生きているひとだといえるかもしれません。ともかく、そういう 2 種類の自己呈示を迫られている、あるいはそれを活用しているひとたちがいるということです。また、「複雑で屈曲した語り」をおこなう「植民地の当事者たち」(232 頁)にも坂部さんは目を向けています。

こうした人びとの声を聞くのだ、彼ら彼女たちの経験を再構成するのだ、という意図はよくわかります。ご本のなかで、わたしにとっていちばん意義のあった、おもしろかった点は、こうしたうまくつかまえ難い人びとの経験や記憶を残してゆく、そうした作業がいままさに中国では現在進行形でおこなわれていて、そこに研究者もなんらかのかたちで介入することによって、そのつかまえにくいようすが、どうにか記録されてゆくという、史料の残し方のくふうがここに示されています。わたしは、そうした現場があるということ、驚きをもって知りました。

これは植民者にとどまらず、たとえば原爆被害者などをめぐっても同様でしょう。そうした体験者がいま、だんだんといなくなろうとしているという、ぎりぎりの時代をわたしたちは生きているわけです。とてつもなく多くの人びと(国民)の人生をまきこんだ出来事の体験者が、もうじきいなくなろうとしている。これは、いま現在を生きているものた

⁹⁾「日本社会における自己呈示が、帰りたくても帰ることのできなかつた戦争の被害者であるのと同様に、中国東北社会において期待される彼らの自己呈示というのは、植民地侵略者でありながらも、中国社会に受け入れられてきたことに感謝する日本人(あるいはその末裔)」と記されている(230 頁)。

ちにとっても、新しい体験をしつつあることとなるでしょう。いまわたしたちは、そういう時代を生きているのです。19 世紀末から 20 世紀初にかけても、日清戦争も日露戦争も、もう現在のわたしたちにとっては、とても古い、現在を生きるわたしたちとはかけはなれた歴史のなかの出来事になってしまっています。さらに 20 世紀中葉の戦争もいま、だんだんとそうなりつつあります。だからこそ、その戦争の記録を残さなくてはならない。しかもその出来事は、当事者自身のアイデンティティが引き裂かれるような経験としてあるわけです。その記録をどのように残すかという課題です。

こうした史料の継承の仕方、過去の出来事の記録の残し方があり、またそれらを活用するときに掲げる「多声性」が、多文化主義の隘路をこえようとしたり、また「もうひとつの」という提示では済まないのだといったりする議論の展望はわかったうえで、さていたいこれがどういう議論の構図となるのか、それは読んでいて知りたいとおもったところとなります。

§

さきほど紹介した、わたしたちが編纂した『記憶のかたち』という書物に岩崎さんが向けた批評は、記憶を論じるときになぜかたちなのか、ということでした。これはまだわたし自身、うまく解決できていない論点です。大きな課題です。この点をめぐっても、坂部さんは最後に、「不定形の場所」(234 頁)という提示をなさっています。また、自分の記憶を表現しえないひとたちもいると記していらっやいます。かたちになりえない経験や記憶を持っているひとたちがいるということを知ってはいる、ということですが、では、そうしたかたちにならない経験や記憶が、「多声」ということとどのようにかかわるのか、そして、その「多声性」を押し潰してしまうほどに強力に、人びとの経験も記憶も一元化する力としてあるナショナルなものがある。ご本では最後のところで、「ナショナルな記憶」(233 頁)という表現もできます。「個別の記憶」すら「ナショナルな記憶」へと統合する力がある(ここでは「統合化と葛藤」となっていますが)、記憶にすら「ナショナルな」という形容の言葉がつけられてしまう事態があるということです。

単純な構図を示すと、記憶を議論するということは、「ナショナル・ヒストリー」とは違

う歴史のとらえ方を指すという方法があったはずですが、一方で、記憶といってもそこにもまた集合性があるという議論もすでに出ているわけですが¹⁰⁾、記憶にすら「ナショナルな」という形容がつけられてしまうと、「ナショナル・ヒストリー」や「マスター・ナラティブ」とならべられた記憶の議論は、いったいどこへ行ってしまうのか、と感じたところです。こんな読み方をしてみました。

.....

阿部の報告ののちに、坂部さんからの応答があり、そしていくつかの議論となりました。坂部さんのお仕事をきちんと理解するためには、この議論の内容も紹介すべきですが、わたしの力不足もあり、それは省略することとしました。坂部さんごめんなさい。報告もまたこの小文の内容も、書評というよりは、わたしが記憶や経験という言葉であらわされる歴史への構えを整理するための 1 つのこころ覚えになってしまった観があります。こうしたデッサンであっても、これから研究を始めようとするひとたちへの、なんらかのオリエンテーションになるかもしれないとおもい、ワーキングペーパーとして出すこととしました。

坂部さん、彦根までおいでくださり、ありがとうございました。

(坂部晶子『「満洲」経験の社会学 - 植民地の記憶のかたち』世界思想社、2008 年、v + 261 頁)

¹⁰⁾ モーリス・アルブヴァクス(小関藤一郎訳)『集合的記憶』(行路社、1989 年)、『思想』第 890 号(1998 年 8 月)は「パブリック・メモリー」の特集を組んだ。